

## 第一章 繰り返された悪夢

その夜も、新宿の街はいつものように賑わっていた。

駅周辺の舗道や町並は、駅から吐き出されるおびただしい人波が溢れ、さんざめく夜の底を陽気な喧騒で満たしながら絶え間なく揺れ動いている。

松田隆一（まつだりゅういち）は新宿五丁目の交差点を渡って巨大なビルの谷間を抜けると、伊勢丹本館の横を通り、明かりの消えた大きなショーウィンドーの前に立っていた。時刻は十一時を過ぎている。

彼は、客と別れてホテルを出たあと、午後の六時から近くの映画館の二階席の一番上の席に深々と身体を埋めて座り続けていたのだ。

遙か下のスクリーンで展開するアメリカ映画のアクション・シーンが幾度となく繰り返されるたびに、場内のスピーカーからあふれ出す衝撃音をなかば朦朧とした眠りのなかで聞いていた。その間、狭い座席の間を通過して移動する観客たちの脚に膝を蹴られて二度目を覚まされ、案内係によって一度、股間をまさぐる指の感触によって二度、目を覚まされたが、なにしろ疲れていたし、腹もへっていたし、《どうにでもなれ！》という思いの彼には腹を立てる気力もなかったが、一言「くそつたれ！」と怒鳴りつけて脚を組み直すと、また眠りつづけた。

やがて二階席もほとんど空になり、映画も何度目かのエンディングを迎えて、場内が明るくなったとき、彼はふっとため息をつきながら起き上がると廊下へ出た。そして長い階段をゆっくり下りると通りへ出た。空腹の胃袋が呻き、小便がしたかったが、もう引き返すわけにはいかなかった。おまけに文無しときていた。

少年はショーウィンドーの前を離れると、ふらふらと歩きだした。種々雑多な店が建ち並ぶ歩道をぞろぞろと通り過ぎる人は数知れず、煌々（こうこう）と輝く照明にいろどられたこれらの店々が歩道に投げかける色鮮やかな照明が、夜を排して道行く人々を誘っていた。街にくりだすこれら雑多な夜の人種の往来は、次から次へといつ果てるともなく続いている。

ふたり連れの警官がちらっと振り返って通っていった。

一瞬、声をかけようと思ったが、ぐずぐずためらっているうちに行ってしまった。少年は自分がいま捉えられている状況をどう訴えればいいのかわからなかったのだ。

隆一はうなだれると、左の路地に入り、歌舞伎町の方に向かって歩き出した。二日前から身に着けているズボンや下着の裾から遠慮なく冷やかな夜風が這い上がって来て、身体にまとわりつく。

ひとり、またひとりと、あちこちの路地から現れる夜の人種たち、ほとんどが男である。たまに女の姿もみえるが、彼らはお互いに言葉を交わすわけではなく、ただひたすら、それぞれの目指す場所をめざして夜の闇に消えていく。

途切れることなく、次から次へと夜の中から現れる夥しい車の群れ。まばゆいヘッドライトと点滅する赤い尾灯で車道を照らしながら、いつ果てるともなく彼の前を通り過ぎて

いく。ときどき、あちこちでクラクションがいらだたしげに鳴り響く。通り過ぎる車窓に映る白い顔が一瞬、こちらを向いたと思ったら、あっというまに過ぎていく。いったい彼らはどこへ、何を目指して走っていくのだろうか？

それは夜のみが知っていた。すべては彼には無縁の人々である。

少年の胸に急に寂しさがこみあげてきた。

街角に黒い影を落とす灯の消えたビルの群れが、眠りをむさぼる巨大な墓碑のように、あるいは男のセックスのように、居丈高に喪の色をした夜空にむけてそそりたっている。

その下を少年はうなだれて歩いていた。

この膨大な街の重圧はすさまじい……この街全体をすっぽり覆う孤独という観念の重圧のもとでうずくまり、ひれ伏す多くの者たち、彼もそのひとりだった。

完全にひとりぼっちで、そのことに死ぬような思いをしているが、その実、おびたしい数に膨れ上がった同類がいるのだ。

とある雑居ビルの前で立ち止まった。この地下に彼のよく知っている店がある。バーともクラブともつかない奇妙な店である。しかし彼は階段を降りる決心がつかない。

仄暗い室内、どんよりとした赤い照明。壁を背にして、何やら得体の知れない染みで薄汚れたソファが並んでいる。男のみ世界。女はひとりもいない。そこには、時に彼の店でもよく見かける若者が独りで、あるいは数人群れをなして席を占めていることもあり、また、かつて彼の客となった男をみかけることもあった。

しかし、彼らとこの十八歳になったばかりの少年を結びつける絆（きづな）などほとんど無いに等しい。次第に細くなり消えかけている彼らのタバコの煙のように、いつ消えるかわかったものではない。はたして、彼らは知っているのだろうか？

なぜ彼が今夜いつまでも街をうろつくのか、なぜ彼が家へ帰らないのか、なぜ彼の胃袋がうめくのか、なぜ彼の髪の毛が乱れに乱れ、腋の下が匂い、立ち止まって放尿する気になれずにいるのか……そして、なぜ彼がたった独りでいるのか？

おそらく彼らが知ることはないだろう……この少年のことを気にかけるものは誰ひとりとしていないのだから。

もし、そんなことができれば、隆一はいますぐにでも荻窪に行って藤井哲也（ふじいてつや）に逢いたかった……おびたしい数に膨れ上がった人間どもがひしめきあう騒擾（そうじょう）に満ちた土地でありながら、その実、あたかも無人の荒野のように荒涼とした侘（わび）しい大都会。この東京でたった一人の、いや日本中でたった一人かもしれない親しい友である。さらに、世田谷にいる伯父高橋浩司（哲也と直樹を除けば、この世でただ一人、彼の信じられる男だった）の優しい声も聴きたかった……そして、母やおじいちゃんにも甘えたかった……でも、でも、すべてあきらめねばならない。

なぜなら、いまこうして、少年の前に一年半前の悪夢が、ふたたび繰り返されていたのだから。

……今日でまる二日、隆一は家へ帰っていなかった。いや、帰ることができなかったのだ……

店からついてきたお目付役の男は、つかず離れず、いまでも執拗にずっと彼をつけている。奴から逃げることは決してできないのだ。

\* \* \* \*

……それは二日前に起こった……

隆一が以前から目をつけていたディオールのジャケットを伊勢丹メンズ館でようやく手に入れての帰りみち、新宿三丁目の歩道を歩いていた時、すぐ横の路地の陰から現れたふたりの男に呼び止められたのだった。

「おい、おまえ……ちょっと待て！」男たちが近寄ってきた。

《それは偶然の出会いだったにちがいないが、少年にとっては生涯、最悪の瞬間だった……》

暗がりの中から現れた彼らの顔を見るなり、驚きのあまり、少年の心臓は跳ね上がり、激しく胸壁にぶつかった。

忘れもしないあの店『ローズ・バッド』のマスター山口とその配下のひとり、屈強な大男大平だった。山口はわずかに左脚を引きずっている。

少年の脳裏に、かつて彼の店で無理やり客をとらされ、奈落の底に転げ落ちた思いで過ごしてきた無残(むざん)な日々が……その悪夢が、いちどきに甦ってきたのだ。

「よう、修(おさむ)……いや、隆一だったな。おまえがうちの店をふけてからのことはいろいろ聞いている。病院に入っていたそうだが……見たところ、もうすっかり元気そうじゃないか。どうだ、ここらでもう一度うちの店で働いたらどうだ」と、山口が言った。

話し方は一見おだやかだが、その声の底には否(いな)とは言わせない強引さを感じられた。

大平が少年の肩をぐいと掴んだ。凄まじい握力だった。振り払おうとしたが、びくとも身動きできなかった。その間、隣に立っている晒(さら)したように青白い荒(すき)んだ顔の山口は、無言のままじっと少年を見据えている。その凍えたように光る眼差しが、少年にはひどく恐ろしかった。人殺しの眼だった。事実、これまで、幾人も彼の手にかかった者たちがいると聴かされていた。

「おまえのダチの哲也が、山口兄貴を刺したことは知っているはずだ」大平が言った。

「……」

隆一は怯えて何も言えなかった。

「哲也は、まもなくその報(むく)いをうけるはずだ……それまで、おまえは奴の代わりに、その償(つぐな)いをしろ。これから店に来て働くんだ。もし逃げたりすれば、おまえのお袋やじいさんがどんな目に遭うかわかっているだろうな？ 居場所はとうにわかっているんだ……こここのところは、観念して、おとなしく俺たちの言うとおりにするんだ。いいな！」

そのとき、隆一は頭上を取り囲む巨大なビルの谷間に重く垂れこめた沈鬱な夜の陰が音もなく頭上になだれ落ちてくるのを見た。彼はその場に立ちすくんだまま動けなかった。

もう何も言えなかった。そして、もう何もできなかった。

……そして、ふたたびおぞましい悪夢に捉えられた隆一。彼がまた店に出るようになってから、二日が経っていた……

## 第二章 出逢い、ふたたび

……背後の足音はまだ聞こえていた。

さっきからずっと彼をつけるように後を追ってきている。

藤井哲也（ふじいてつや）は新宿二丁目の角を曲がるとき、一瞬、立ち止まると素早く振り返って背後の歩道に目を凝らした。遠くの街角に佇むひとつの黒い人影が見えるが、夜の闇にまぎれてその姿はよくはわからない。あるいは自分の思い過ごしかもしれないとも思ったが、一方、胸のうちでは、自分が秘かに誰かにつけられていることを確かに意識していた。

ここへ来る途中、哲也は、靖国通りを少し入った路地にある馴染みの小料理屋「陣屋」で夕食に好物の京都ラーメンを食べたのだが、その店を出てから、ふと、彼は自分を尾行しているらしい人影がいるのに気づいたのだった。ずっとつかず離れず追ってくる。

路地の角を曲がるたびに、さっと背後を振り返ると、確かに同じ男の影が一定の距離をおいてついて来ていた。ふと得体のしれない不安に捉えられた。

路地を抜けて、街灯に明るく照らし出されている大通りへ出てしばらく歩いたのち、ふたたび振り返ると、それらしい人影はいつか消えていた。

一瞬ほっとした哲也は軽く肩をゆすって緊張をほぐすと、ふたたび歩き出した。決してひそかな不安が消えたわけではないが、しかし、彼はあえてそれを胸の奥に押し隠した。いまは一刻も早く西條直樹に逢わねばならなかった。

そのとき、見るともなく、すぐ前に行く夫婦らしい二人連れの男女を目にとめた。

ゆっくり歩いている女性は両腕を胸の前で組み合わせている。その懐の中から、幼い子供の微かな泣き声が聞こえてきた。

女性は優しくあやしながら幾度もそっと声をかけている。寄り添って歩く男性も思わず首をかしげて、笑みを浮かべながら子供をのぞきこんでいた。

そうした親子の睦（むつ）まじい様子を見るともなく眺めていた彼の脳裏に、思いがけなく、まばゆく光り輝くある懐かしい光景が甦ってきたのだ。

……あれから、もう一年になる……

ニューヨークから帰ってくる高橋浩司をみなで空港へ迎えにいった日のことが甦った。

不運にもヘロインに狂った男に殺された恋人川口礼子の遺骨と共に、辛くも命を救われた幼い息子連れてニューヨークから帰ってきた浩司を、直樹たちと共に成田へ迎えに行ったときのことが、ふと思い出されて胸が熱くなった……

空港一階の到着ロビーは、各地から次々に飛来する飛行機が吐き出す乗客たちとそれを迎える者たちの群れでごった返していた。吹き抜けになったロビーの高い天井に至る側壁は全面が広大なガラス窓になっており、そこから冬の陽光がさんさんと差しこみロビーを明るく照らし出していた。時折、薄い離れ雲が光を遮るとあたりがやや陰りを帯びた。税関のドアが開く度に、様々な装いや表情の乗客たちがみな一様に満面に微笑を浮かべ、幾

つもの大きなスーツケースや手荷物をカートに積んだり、両手に持ちきれないほど下げたりしながら、ぞろぞろとロビーへ出てきた。そのつど、笑い声や呼びかける声やそれに答える懐かしげな声があちこちで飛び交っている。帰国した乗客者たちを迎える者たちの群れが、ひとり、またひとりと、出口から現れるお目当ての乗客を取り囲むようにして押し包むと、楽しげな波打つ喧騒のうねりとなって、ロビーを揺れ動きつつ出口の方へ移動していた。

黒田夫妻、京子、真由美、直樹と哲也、隆一と透、そして大沼夫妻、これら浩司の帰国を迎える一団が、税関の出口を取り巻く出迎えの群集の一番前に出て、乗客たちが現れるのをいまかいまかと待っていた。場内アナウンスはすでにU A—八〇一便の予定より二十分早い到着を告げていた。直樹は腕時計で時間をあらためた。二時五十分。もうそろそろ通関も終えて出てくる頃だった。そのとき、税関のブロックを通して出てくる乗客たちの一番先頭にスーツケースのカートを引きながら歩いてくる一際背の高い浩司の懐かしい顔と姿があった。彼の胸には礼子の遺骨を入れた白い布で包まれた箱が下げられており、彼に付き添うようにU A航空のコンシェルジュの制服を着た若い女性が一台の小さな乳母車を押してついてくる。

浩司はこの世で最も大切な者を失い絶望の極地にいた。彼と恋人の礼子はずいぶん結ばれることはなかった。しかし一方、希望もあった。彼のそばにふたりの命ともいえる大事な息子がいたのだ。そして、いまそれに優るとも劣らないかけがいのない大切な人々が出口で彼を待ち受けていた。彼は決して孤独ではなかった。

ロビーへ出た浩司は、コンシェルジュから乳母車を受け取ると、礼子の遺骨の入った箱をそっと息子の足もとに置いて顔を上げた時、懐かしい人間の輪がたちまち浩司とその乳母車をぐるりと取り囲んだ。そのとき、真っ青な空を流れる雲が切れて、巨大なロビー一面を覆う透明なガラスを透してさっと太陽のきらめく光が差し込んできたのだ……その光景が、いまふたたび鮮やかに甦っていた。

身をかがめて乳母車のなかを覗いている浩司。そしてまわりを取り巻き、顔を寄せ合っ

てそっと乳母車のなかをみつめる者たち、とりわけ直樹と哲也は思わず顔を見合わせて感動の笑みを浮かべずにはいられなかった……燦然と光を浴びて純白に輝く産衣（うぶぎ）に包まれた可憐な幼児が、胸のうえであたかも合掌するかのよう

に、その小さな指を組み合わせ、つぶらな瞳で無心にその掌を眺めていた。それは無垢と愛と、そして希望そのものの姿と見えたのだ……

……一瞬、甦ったその時の感動と共にまばゆい光輝の輪に包まれた記憶が、いま、哲也の胸をぱっと明るい光で照らしだし、あらためて震えるような興奮で押し包んだのだ。それは同時に、これから逢うはずの西條直樹に対する彼自身の深く、そして熱い想いから生まれたものでもあった。

……その直樹と、もう三ヵ月近く逢っていなかったのだ。

哲也は腕時計で時間を確かめた。すでに約束の時間、十時をまわっていた。

この時間になると、きらびやかな照明に照らし出された賑やかな夜の街に溢れていた群集も、さすがにまばらになり、深い夜空の下、照明の消えたビルの谷間や街の裏通りを一種、不穏な静寂と沈鬱な深い藍色の陰が覆うようになる。

哲也は足を早めて直樹との待ち合わせの場所へ向かった。懐かしさと嬉しさのあまり、思わず唇に笑みがこぼれるのを止めようもない。

『お兄ちゃんが帰ってきた！ 今日、ニューヨークから戻ったのだ』

昨年、不慮の死を遂げた恋人の葬儀と、その母親の死と引き換えに産まれた息子を引取りにニューヨークへ飛んだ高橋浩司が、三か月後に帰国して間もなく、黒田商事の社長である伯父の黒田竜太郎が八十歳を迎えたのを機に、常務である甥の浩司に後事(こうじ)を託して引退したのだ。同商事の社長を委ねられた浩司は、親友の西條直樹を自分の右腕として常務に迎え入れ、ふたりで会社の経営に当たることになった。そして、三カ月前、直樹は社長代理として米国の主要な取引先との契約を新たにまとめるためにニューヨーク支社へ出向していた。そして今日、三カ月の米国滞在を終えて、午後二時四十五分着のUA一八〇一便で成田に帰ってきたのだ。

所属している芸能プロの仕事を終えて、哲也が荻窪のアパートに帰ってきてまもなく、その直樹から電話がかかってきた。そして、今夜、黒田商事での打ち合わせを終えたら、ぜひ例のバーで逢いたい、と言って来たのだ。

「今日の午後、空港に着いてすぐ電話したんだが、留守だったので、またかけてみたところだ……どうだ、元気にしていたか？」と直樹の弾んだ声が聞こえてきた。

「うん」哲也は一瞬、胸が迫って言葉が途切れた。

「やっと帰ってきたね。ずっと待ってたんだよ」興奮のあまり思わず声が震えた。

直樹も、彼の声を聴いたとたん、懐かしさがこみあげてきて、一瞬、息をのんだ。

「哲也！もし予定がなかったら、今夜、歌舞伎町の例のバーで逢わないか？」

「うん、もちろんいいよ。おれも逢いたい！」哲也が答えた。

「いま会社にいるんだが、こっちの仕事を片付けてから行くから、十時頃になるけど、かまわないか？」

「かまわないよ。いつでも飛んでいくよ。十時に例のバーだね」

“例のバー”とは、歌舞伎町一丁目の雑居ビル地下のバー『モンマルトル』のことだった……忘れもしない、彼が初めて西條直樹に出逢った思い出の場所である。

人影のまばらな舗道を歩く哲也に、並び立つ街灯が次々に灰白い侘しげな光を投げかけてくる。もうすでに直樹は店に来ている頃だろう……ひさしぶりに逢うと思うと、気がせいて哲也はいっそう早足になった。

突然、横の路地から現れた男が彼の前に立ちふさがった。

「おい、ちょっと待て」ドスのきいた険しい声だ。

一瞬、どきっとして足を止めたが、今は余計なことにかかずらわっている暇はなかった。

「どいてください。急いでいますから」哲也は相手を見もせず、そばをすり抜けようとしたが、たちまち男の大きな手でぎゅっと腕を掴まれた。

「待てと言っているんだ！」容赦のない厳しい声だ。

ふたりは歩道で向かい合った。

相手は三十五、六歳位のがっしりした体格の男で、ゆうに一八〇センチを超える大男である。右目の下から唇の端にかけて、頬に抉(えぐ)られたような凄惨な傷跡がある。

哲也はその顔に見覚えがあった。かつて『ローズ・バッド (薔薇の蕾)』の店にいたとき、しばしば見かけたことを思い出した。忘れもしない、あの店 (男色の仲介を生業とする店) のオーナー、山口俊介の右腕といわれた男で確か大平と呼ばれていた。

哲也の顔色が変わった。やはり自分の直感が正しかったことを悟った。さっきから彼を尾行して人影はこの男だったのだ。そして、男の背後にいるのはまぎれもなく山口俊介に違いなかった……ひさしく忘れていた男の名前である。

山口俊介……ほぼ一年まえの夜、西新宿の高層ビル街の屋外駐車場で、哲也はその山口と刺し違えて、自分も深手を負いながら、相手には瀕死の重傷を負わせたのだ。

いま彼の配下が現れたということは、凄惨な修羅場をくぐってきたやくざ者である山口の自分への報復を覚悟しなければならないということだった。

そのとき、一瞬のうちに、あの時の山口との壮絶な闘いのすべてが……その闘いに至るまでの対決が微妙に変化していった経緯や彼の心と肉体を捉えた凄烈 (せいれつ) な感覚のすべてが……哲也の脳裏にまざまざと甦ってきた。

……山口が京王百貨店で目をつけた青年、斉藤透を追って西新宿の高層ビルの谷間にある屋外駐車場まで来たとき、彼の誘いを拒む青年を脅そうとしていた山口に、哲也が声をかけて始まったあの壮絶な決闘の顛末を思い出したのだ……

「山口！ それくらいにしろ。彼にはかまうな！」哲也が鋭く声をかけた。

それを機にふたりの間で始まった激しい口論……かつて自分自身が彼のところで味わった悲惨な体験や、同じく彼の店で辛酸 (しんさん) をなめさせられたあげく狂気に堕ちた親友の松田隆一 (店では“修”と名乗っていた) への冷酷な暴言をも含めて、ふたりは激しく言い争ったのである。

「……修は無垢の子供と同じだったんだ。お前が誘わなければ決して穢れることはなかったはずだ。あの子が狂ったのはおまえのせいだ。俺やあの子らが反吐にまみれて稼いだ金のうえであぐらをかいているおまえは最低の野郎だ。修や俺自身や他の者たちのためにも、おまえは責任をとるんだ。いいか、自分の犯した罪の償いをするんだ！」と哲也が叫ぶと、山口がせせら笑いながらうそぶいたのだ。

「裕っ！ (かつて哲也は彼の店で裕次と名乗っていた) おんどれ、何をぬかしとるんじやい。ガキのくせしてなめた風な口をきくんじゃねえ……俺のせいだと？ 責任をとれだと？ ふざけるんじや……」

しかし彼は最後まで言葉を続けることはできなかった。なぜなら、その瞬間、哲也の突き出したジャックナイフが山口の下腹部に深々と突き刺さっていたからだった。一瞬遅れて山口が抜き放った匕首 (あいくち) も哲也の左腿に鋭く食い入っていた。

そうした復讐劇を演じていたあいだ、彼の全身全霊を占めていたのは自分達を虐げた相手に対する報復への決意と男としてぎりぎりの誇りに他らなかつたのだ……